

第7章

「南北の学問」としての開発研究へ —時間・空間・世界観から考える—

佐藤 峰

I. はじめに：時計の矢，時間の環¹

1997年から2年間を、青年海外協力隊（以下、協力隊）の一員として、中米のニカラグアの山間地で過ごした。小さな町役場に派遣され、役場やNGOの人たちとともに、予算があるときには自動車で、ないときには歩きと馬で、周辺の村々を訪れた。村々の状況を把握し、可能な範囲でNGOなど組織と村をつなぎ、植林事業が実施されるよう間に入るなど、小さな橋渡しをすることが仕事であった。

村々を回る中でまず気づいたのは、時計をしている人が非常に少ないことである。ラジオが告げる時報で十分という。確かに村の人々の暮らしには、時計はあまり必要ない。朝起きて、農作業や家畜の世話、川での水汲みや洗濯、そして調理などの家事と、シンプルな暮らしぶりだからだ。「約束の時間を守る」ことに対するの忠誠心は薄く、1時間遅れで物事が動く。しかし人々はこれを「Hora Nica（ニカラグア時間）」と呼び、気にはしていない様子であった。私の仕事も事前にある計画に基づいたものではなく、「進んだ」と言えないようなペースで行われた。いろいろ嫌なことはあっても、今思い返しても、人間も生き物だという実感を得られ貴重な経験であった。そこには、自然という「大きな生命」の時間に、人間の「小さな生命」の時間がシンクロした。「生命の時間」のような時間が流れていた。もっと正確には、時が淡々と環のように巡っていた。

時折「過去に止まったまま動かないように思える時間」に遭遇することもあった。村で訪れる家々の中には、家族の写真とは別に、比較的若い男性の

写真があることがあった。話を聞くと、内戦での死者の遺影であるという。自分より長く生きるはずだった人々のことが話されるとき、「時が戻される」あるいは「心が過去にとどまり動かない」ときがあった。二年間にわたる、ささやかで豊かな日々が教えてくれたのは、「時計が刻む、単線的に進む時がある」ことが前提でない世界があることだった。

その後時を経て、もう一度ニカラグアに暮らす機会があった。JICAの技術協力プロジェクト（以下、プロジェクト）の長期専門家として、2002年から2年間派遣されたのだ。再びゆったりとした時間感覚に寄り添う心の準備と期待と共に、夜のマナグア空港に降り立った。しかし期待とは真逆に、そこにはハイペースな時間が流れていた。はじめは時の経過による社会の変化や、プロジェクト対象地が都市近郊であるからかと思った。しかし徐々に、それはプロジェクトの周りを結界のように取り囲む時間、いわば「開発の時間」であることに気がついた。そこには、協力隊員としていた際にはない、時間と成果を管理するツール、ログフレーム²が存在した。詳細は後に述べるが、ログフレームとはプロジェクトの目標・達成するための投入・成果を測るための指標・外部条件などで構成された表である。参加したプロジェクトでも、予め定められた計画があり、計画を成就するための投入があり、期待された成果があった。時は矢のように進み、物事は時間通りに淡々と進むことが美德とされた。課題は専門家ごとに効率よく分業され、まさに佐藤仁（2016）が指摘する、「分業による効率的な経済活動」に似た構造でプロジェクトが進行していた。

協力隊での経験とのギャップに苦しみながら、これは開発人類学でよく言われる「リアリティ問題」だけでは説明できないと思った。開発人類学においては、人々のリアリティ（個人の解釈によって形成される事実、チェンバース2000）が的確に捉えられていないことが、開発事業の失敗の大きな要因であると繰り返し指摘され、人々のリアリティを中心にした支援が理想とされる（ノラン2007）。環境と開発、脱／反開発、ポスト開発などの開発研究においても、「時間の流れと共に開発（物質の拡大）が進む」という仮定や、単線的な時間の流れの中で、計画に基づき、投入がされ、成果が得られるという機械論的な理解に対して、たびたび異議申し立てが行われてきた。

しかしそれらの議論は基本的に、「開発のあり方自体」の問い直しである。

他方で、時間という入り口から開発研究や開発援助について直接明示的に再考したものは、管見によるとはほまない。よって、万人に対して淡々と単線的に時間が流れるという設定がどのように立てられ、それが空間や物の捉え方に影響し、学問や開発援助のあり方に影響しているのかについてこの小論では考えたい。ニカラグアでの経験が示唆するのは、時間感覚の違いはその奥にある価値観や世界観の違いにつながると直感するからだ。

本論ではまず、ニカラグアで感じ取られた「生命の時間」と「開発の時間」との差異について、科学哲学における二つの時間、「存在時間」と「意識時間」のルーツと特徴に説明を求める。そして前者の時間の中でも、特に物理学的時間がどのように絶対化され、空間や世界の捉え方を規定し、多くの学問にも影響してきたかについて明らかにする。次に、再現性や客観性が強い、物理学に親和性が強い「近代科学の知」と、それに抗する立場の、日常感覚を重要視する「臨床の知」がどのような特徴を持つかについてまとめる。その議論の中で、暮らしの感覚に立ち返り、生命の流れやゲノムから捉え直そうとする、生命科学の試みについても紹介する。最後に、上記の議論を現在の開発学や、開発実践における議論につなげ、冒頭の事例に立ち戻り、開発・援助が、未来に向けて「南北の学問」として再構成されるための構想を進めていく。

II. 二つの時間と二つの世界

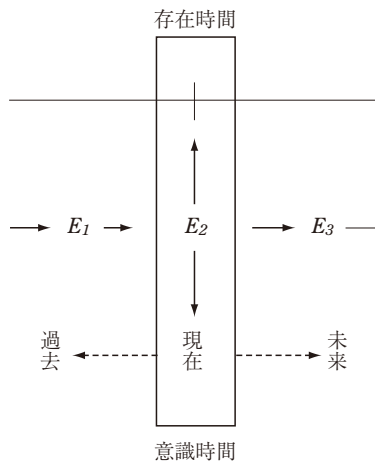
「それを私に問わないなら私はそれを知っている。しかし誰かが問う者にそれを説明しようと欲するならば、私はそれを知らないのである」、これはアウグスティヌスが『告白』の中で時間について述べた有名な一節である。どうやら時間とは、古代ギリシャから、自然で厄介な存在として常に捉えられてきたようだ。手元に『東京大学公開講座：時間』という本がある。時間をめぐる構想が様々な学術領域より紹介され興味深い。少し古い本だが、時間をめぐる哲学上の議論が、素人に分かるよう平易に説明されており未だ示唆に富む。ここでは、伊東と村上の論考を中心に取り上げる。

伊東（1980）は、多くの哲学者の時間をめぐる議論を俯瞰し、時間には大きく分けて、「存在時間」と「意識時間」があるとす。そして、前者の起源をアリストテレスの『自然学（1976）』に、後者の起源をアウグスティヌ

スの『告白 (2014)』に求め、図1のように、二つの時間を説明する。

『自然学』においてアリストテレスは、「運動 (キネーシス)」とその変化が時間を規定すると考えた。その運動はなるべく定期的なものを理想だとし、当時最も規則的で一定な運動であった天体の運動を、時間を規定する基準値として採用した。よって、アリストテレスによると、時間は図1の上の線のように、 $E_1 \rightarrow E_2 \rightarrow E_3$ と一定に前に進むものとして理解される。こうして、外的な存在と時間を結びつけた、「存在時間」が誕生した。対照的に意識時間として時間を捉えるのが、アウグスティヌスである。アウグスティヌスは『告白 (2014)』の中で、過去・現在・未来とは何かに思いを巡らす。そして過去とは現在から見た記憶であり、未来とは現在から見た期待であるとし、時間とは、究極的には今現在の我々の「心のうちにある」と結論づける。これを表すと、図1の下の線のようになる。時間はあくまで「意識=今の私の主観」がある現在を起点に規定されるとする (同上)。

「存在時間」はその後、三つの「科学的時間 (物理学的・生物学的・心理学的)」へ発展する (村上 1980)。一つ目の物理学的時間は、外的物体の運動に即する時間を指す。ガリレイの振り子の等時性の発見により決定づけられたこの時間では、定期的な周期運動が基準とされ、測定者は位置の変化を測ることとなる (渡辺 1983)。この物理学的時間の特徴は絶対性、単一性、



(出所)：伊東 1980, p.42

図1 存在時間と意識時間

連続性、無限性、等質性、可逆性と整理される（山本 1997）。

二つ目の生物学的時間は、外的物体に対して内的身体に関する、生命現象に即する時間で、デュ・ヌイの議論（1994, 初版 1936）の起源を持つ。デュ・ヌイは、傷の治癒を取り上げ、それが必ずしも一定速度で起こらないことに着目、年齢が説明変数となり治癒の効率が変わることを明らかにした。同様に生理学者のカレル（1992, 初版 1939）も、細胞の組織培養を取り上げ、直線的な時間の流れと必ずしも比例しないことを指摘し、「内なる時間（生物学的時間）」が「外なる時間（物理学的時間）」とは違うことを指摘した。

三つ目の心理学的時間は、脳の認知に即して考えられる時間、いわば「脳時間」となる。心理学者のウィリアム・ジェームス（1992-93, 初版 1892）はある人の生涯の、ある時期における心理的長さは、その人の年齢に逆比例するという「ジャンネーの法則」を発見した。この法則は、最近の脳神経科学でも実証的に解明される。たとえばイーグルマン（2012）は、実際には同じ時間が経過していても、脳が新しい情報を処理する際には、時間がかかるという感覚を我々に与え、他方で、同じことを毎日続けると、脳が情報処理に係る時間が短くなり、時があつという間に経過するように感じることを実証実験から明らかにした。

しかし、一見異なる三つの時間は、対象が外なる物体であっても、内なる身体や、奥なる脳内であっても前提は同一だ。つまりは、何かしらの「存在の変化に即する前に進む時間」であり、「外にいる観察者」が何かしらの「客観的な物差し」によって、運動や速度などの変化を測るという設定には変わりがない³。

この三つの時間のうち、確たる世界観にまで昇華したのが物理学的時間である。村上（1980）は古典物理学には、外的運動の変化を測る以外にも、「原子論的世界観」があることが重要とする。原子は「物質がそれ以上分けられない最小単位」であるが、実際には手ではなく理性によって分ける。原子はミニマムな物質な性質（第一性質）を持ち、手で触れられる感覚的な性質（第二性質）を持たない。感覚的な性質（第二性質）を持つ現実世界を「原子のダンス」だけで表すのが原子論的世界観である。この世界観を村上は「世界ヨーカン」と表現する（同上）。ここに一本の羊羹があるとして、それを世界とし、羊羹の外側に学者が位置し、世界を俯瞰する。その羊羹を2箇

所切ってみる。 t_1 という切り口の原子を調べれば、あるいは t_2 というやや時間が経過した、別の切り口の原子と比較すれば、全世界が分かるというのがその世界観である。だがよく考えると、この切り口は幅を持たない時間、時間の幅のない時刻であると指摘、そんな世界についての情報は、虚構ではないかと喝破する⁴。しかし学問の世界には、最初に理論を確立した物理学がはまだ「北」として存在し、その他の遅れてきた「南」の諸科学がその世界像を模し、極力「北的」になろうとする「学問の南北問題」が存在すると、鋭い切り込みを入れる（同上）。

確かに、物理学的時間に代表されるような理性がつかさどる存在時間や、原子論の世界観だけでは、ものごとの真髄はつかめないだろう。しかし感性の世界で感じ取られることだけでも、世界は語れない。感覚の世界で感じ取られること、理性の世界で感じ取られること、この二つの目が統合される必要があるのである。

開発援助の世界においても、プロジェクトに税金が使われていることもあり、数量的な説明や再現性のある施策は、説明責任を果たす上では必須だ。しかしプロジェクトの最終目的は、途上国貧困層の日々の暮らしの質の維持・向上への貢献、いわば応答責任である。そして日々の応答は、個別具体的で裁量性が高い、再現性の高くない作業である（Yanagihara 2016）。人々のリアリティや感性を捉え、日々の暮らしにプロジェクトがなんらかの役に立てるように、彼ら・彼女らの感性に寄り添うことが求められる。この二つの世界の乗り入れは、果たして可能なのであろうか。

Ⅲ. 近代科学の知と臨床の知⁵

1. 二つの知とその系譜

そもそも、もの見方や価値観が違うこの二つの世界観は、どのように形成されたのだろうか。『自然学』において、時間の客観的理解の源流とされるアリストテレス（1971）は、時間の中で繰り返される経験・事象の解釈である世界観、つまりは知識を、3分類している。エピステーメ（科学：最終的に答えが一つに集約する知の領域）、テクネー（技術：ものを生じせしめることに関わる制作）、フロネーシス（為す知：暗黙知・実践知・倫理）である。エピステーメが「理論・政策」を、テクネーが「技術・製作」を、

フロネーシスが「実践・行為」を司る知である。Flyvbjerg (2001) は「近代科学の知」として概念が発展したエピステーメとテクネーに比べ、行為や実践に関わる知であるフロネーシスには、今日それに相当する概念が見当たらないとする。また、佐藤仁 (2009) は、フロネーシスの特質を M. ポランニーの「暗黙知」に準え、①総合的な性質、②身を持って学ぶ、③文脈と個別な事柄を重視する知とし、故に「知の階級制」において周辺化されるとする。

しかし、周辺化されつつも、フロネーシスに一つの源流をおく知の系譜においては、違うあり方が常に模索されてきた⁶。この知の系譜において臨床の知（南方の知）を提唱した中村雄二郎は、表1のように近代科学（科学知）と臨床の知を対比している。中村は、普遍性、論理性、客観性に特徴付けられる科学知により理解された現実とは、視覚独走であり機械論的、力学的に選び取られ、整えられたものにすぎないとする（中村（雄）1992）。そして、感覚の協働に基づく知である、固有性・多義性・行為性を中心とした知の価値を再認識することを主張する。そのためには、各人の経験（他者との能動的でかつ受動的な相互行為）と実践（決断と選択を通して現実の諸相を引き出す、優れて固有の場所的・時間的な行為）への立ち返りが不可欠と主張する（同上）。「立ち返り」と表現しているように、中村は近代科学の知を全否定しているわけではなく、過信に対して強い反発を示す。つまり、現実には即したバランスの良い現実認識や知のあり方を模索している。たとえば、分子生物学の実証実験の客観的結果に裏付けられた近代医学においては、特定病因説に基づき、処方箋が出され、投薬が行われる。その処方箋は

表1 近代科学の知と臨床の知

	臨床の知（実践知、生活知）	近代科学の知（科学知）
ルーツ	スコラ哲学（アリストテレス）	機械論（ガリレイ・デカルト・ニュートン）
研究者の主観	前提（価値・知慮の重視）	捨象（科学的探求とは無関係）
方法論	統合的（観察、論考、経験）	二元的（実験、実証、説明）
重点	生活世界（質）、生命現象、関係の相互性	物質世界（量）、数値、実証、因果関係
特徴	固有性、多義性、行為性	普遍性、論理性、客観性
関連学問	精神医学、文化人類学、比較行動学	厳密科学（例：分子生物学）、社会諸科学（例：マルクス主義的社会理論）

（出所）：中村（雄）（1992）を基に筆者作成

同じ症状の患者に対して、汎用性は高い。しかし、人の身体や暮らしは個別具体的である。特に近年増え続ける慢性疾患や精神疾患は、要因や回復の鍵が生活様式や家族関係など、多様かつ生活の質に関わる要素に依拠する。双方の知をうまく融合させないと、解決には結びつかない。

2. 生命科学の挑戦

実際に「科学的な見方」だけでは、人々の心を捉えきれない、現実とのずれは否定できないという問題意識が、近年において、自然科学、特に生物学の領域から出てきている。「自然の観察」から時間の捉え方に関する議論が発生していること、そして「生物学的時間」が「物理学的時間」に対抗して議論された学説史を鑑みても歴史的な伏線がある。

観察と解剖で始まった生物学では、1970年代以降、小さな単位に生命をパーツに細分して考える、機械論的な分子生物学（DNA工学）が台頭してきた。分子生物学的な生命観に立つと、生命体とはマイクロなパーツからなる精巧なプラモデル、すなわち分子機械にすぎないという機械的生命観が採用される（福岡2007）。生命体が分子機械の集合体であるならば、それを巧みに操作することで生命体を作り変え、改良することも可能という仮説のもと、特定の遺伝子が機能しない遺伝子改変動物、ノックアウトマウスをつくった。福岡自身も特定の消化酵素が分泌できず栄養失調になる設定のノックアウトマウスを誕生させたが、マウスは何事もなく成長した（福岡2009）。部品を取り替えるというアナロジーでは、生命は説明できないことを身をもって知った福岡は、機械と生命の違いの説明を時間に求めた。機械には時間がなく、どの部分からでも作ることができ、完成した後からでも部品を抜き取り交換できる。しかし生物には時間があり、部品を抜き取り交換できず、その内部には常に不可逆的な時間の流れがある（同上）。福岡（2009）は更に、生命の本質を「動的平衡にある流れ（細胞が絶え間なく動き、出し入れされながらも全体として恒常性が保たれている状態）」とし、人と社会の持続性を語るアナロジーとしても採用している。

生物学の分野で、より未来社会構想に近い議論をしているのが、中村桂子である。中村は生物学においては、元来日本語で開発と訳される Development は、進化・展開（Evolution：巻物をほどいていくように、自らのうちに持つものを望みの方向に伸ばしていく）に親和性が強く、進歩（Prog-

ress：できるだけ早くよりよい状態になる）と分けて考えられると指摘する（中村（桂）2006）。そして、表2のように進化と進歩に付随する特徴を対比する。臨床の知により親和性が強い進化は、過程・質・多様あるいは固有性、関係と流れの重視、生命に特徴付けられる。そして科学知により親和性が高い進歩は、能率、量、均一性、構造と機能の重視、機械に特徴付けられると整理する（中村（桂）2014）。

中村も生物学がDNA研究に一元化されてきたことへの疑問から、生命の本質の説明を、DNAの集合体であるゲノム（ある生物が固有に持っている遺伝子の集合体）に求めた（2006）。周知のように、DNA（デオキシリボ核酸）とはその一部に遺伝子（遺伝情報）を持つ物質である。初期の分子生物学は、モノーの『偶然と必然（1970）』に代表されるように、DNA = 遺伝情報 = 生命という仮定の上、DNAの構造解明に力を注いだ。この解明は、1980年代の「遺伝子工学」へと受け継がれ、上述のノックアウトマウスの逸話に繋がっていく。しかし、1980年代半ばからは、遺伝子という「原子」ではなく、ゲノム、つまりより大きな単位において生命を捉える必要があるという主張によりゲノム解析が進んだ。人ゲノムでは遺伝情報（遺伝子）は2割で後の8割は「遺伝子のはたらき方を調節する部分」にかかる情報であること、また、一人ひとり異なるゲノムを持っていることが分かった（中村2013）。つまりゲノムには普遍性と固有性双方が共存する。中村（2014）は議論を展開させ、進化を中心にした社会、つまりは、歴史・関係・日常・物語を重視した知のあり方、人口・人・自然のバランスがとれた自然と調和する技術が採用される、「自己創出型社会」を提唱する。つまりは意識時間と存在時間の統合、生活感覚と科学知識の統合が社会構想の貴重低音となる。

福岡と中村の議論の共通項は、循環（流れ）、均衡（バランス）、維持存続

表2 進歩と進化の特徴づけの対比

進化・展開 (Evolution: Development)	進歩 (Progress)
過程	能率
質	量
多様性（固有性）	均一性
関係と流れ	構造と機能
生命	機械

（出所）：中村 2014, p.30

(恒常性)であり、その営みは関係性、固有性、多様性に特徴付けられながらも普遍的なものとして規定していることである。生命や細胞のあり方から社会のあり方を構想すると、人類の将来は明るいように思える。「二つの時間と世界観」を統合することも可能に思える。しかし本当に、そんな未来社会構想は可能なのであろうか。それとも、単なる空理空論なのだろうか。

IV. 開発・援助とその世界観

これまでの議論では、物を対象にした物理学、生き物を対象にした生物学を中心に、時間・空間・世界観を考えてきた。しかし、開発研究および開発援助は主に途上国社会を対象にした実学であり、成果を問われる実践である。今までの時間および、知識のあり方の議論は、開発学および開発援助の未来を描くためにどう役に立つのだろうか。ここでは開発諸学における時間の扱いの比較をした後、冒頭の開発援助のシーンに戻り、その現在形と未来形について構想していきたい。

1. 開発諸学における時間の扱い⁷

開発・援助が対象とする社会にある資源の大半は、流れる時間と共に朽ちていく。そして時間が流れるのは誰にも止められないため、物事は何も手を加えなければ長期的に見て「衰退」に向かうのが自然の摂理である。小林(2011)は「開発」とはこの摂理に逆らって、何かを創出・拡大する行為であると、開発学は、開発という現象に特有なはずの時間の概念を、明示的に織り込んできたとはいいがたいと指摘する。たとえば、開発途上国に特有の政治についての研究は大量の蓄積があるが、これらの知見の多くは、途上国のある発展局面におけるスナップショットを提供するものであり、長期間にわたる動態的な変化が考察の対象となることは少なく、時間の変数ではなく定数として扱われていると指摘する(同上)。

開発にとって時間とは、単に資源を朽ちさせる敵なのだろうか。ここでは開発諸学が、時間とそこに付随する対象をどうとらえ、世界観を紡いできたのか改めて考えてみたい。「キャッチアップ」や「トリクルダウン」という典型的表現に見るように、開発学にとって時間は開発介入が浸透していく際の単なる与件あるいは時差としての自然数にすぎないのだろうか。ここで

は、開発諸学における貧困削減の理解と時間について、表3に即して考えていきたい。

まず、開発諸学をリードし、援助の基礎設計にも深く関わる経済学は、基本的に貧困削減の鍵を資本蓄積と効率的資源配分と考え、「市場経済や経済発展をうまく作用させれば貧困は解決可能である」という姿勢を取る（上山2011）。よって貧困とは、その蓄積を妨げる経済成長の欠如、およびその恩恵を受けられない貧困層の存在と定義づけられる。貧困削減の主な施策としては、技術革新による経済成長および、貧困層への社会保障の付与による「機会の平等」を提案する（同上）⁸。

時間ということから解釈すると、経済学においては、時間は存在時間、特に物理学的時間および世界観に親和性が近い性質を持つと思われる。そこでの時間は、資本蓄積に付随するニュートラルな t であり、機会平等という配分政策が付与された「時点（時刻）」である。そして、技術革新という動力の投入による経済成長という運動までにかかる時間は少ない、つまり成長の速度が早いほど望ましいとされる。他方で、効率的な資源配分が行われることを暗黙の了解としているのか、より個別具体的な事情が影響する「配分後の時間」については、あまり留意が払われていない印象がある。特に社会保障政策については、その施策が貧しい人の一生の内に具現化するのかという「生物学的時間」、あるいは条件的現金給付にも顕著なように、個別具体的な

表3 開発諸学における貧困削減の理解と時間

	基本姿勢	貧困の原因	貧困削減策	時間の扱い
経済学	資本蓄積と希少資源の効率的配分が鍵	経済成長の欠如、成長の恩恵を受けられない人の存在	技術革新による経済成長の促進、貧困層への社会保障政策	分配より配分重視。資本蓄積と比例。（存在時間）
政治学	利害不一致・権力構造による資源分配の非対称性が根源	誤った公共政策をもたらす政策過程	適切な公共政策をもたらす政治制度を設計	分配過程に着目。提言は経済学的（存在時間）
法学	基本的人権や個人の尊厳の侵害に焦点	法規範、裁判制度、三権分立など「法の支配」の欠如	基本的人権の侵害の判断と法的解決	機会均等・規則適用による即時解決（存在時間）
人類学	文化相対主義の立場より、貧困より貧困を作り出す外的要因に着目	貧困化：外部者の尺度が内部者に押し付けられ内在化	内面化した抑圧の緩和、リアリティの把握、外部組織の変革	過程や主観に注目。当事者の時間感覚の尊重（意識時間）

（出所）：小林他（2011）を基に筆者作成

行動変容およびその継続が、どのように個々人の内面で起こっているかに関わる「心理学的時間」など、貧困削減の個別的過程に親和性がある時間軸については比較的理論が薄い。また、個別具体性は捨象される設定にあるのか、経済学が所与とするはずの「合理的選択」に深く関わるだろう、人々の主観を扱う「意識時間」の位置づけは、学問の中心にはない⁹。

対照的に政治学は、過程を扱う学問とされる。利害不一致による資源分配の非対称性が、社会の「機能不全」、つまりは貧困の根源にあるとする。そして、「誤った公共政策」をもたらず開発途上国の政策過程を是正し、適切な公共政策を出力する政治制度を設計することに解決策を見いだす。その制度には、国家の政治制度の民主化・分権化、市民社会強化および政治参加の促進、選挙以外の政治参加機会の確保などがある（近藤他 2011）。

時間という観点で見ると、政治学は不思議な学問に思われる。入り口の問題分析においては、政策過程での「障壁」になる要因を分析している。その過程は様々な個別具体的事象に大きく左右されよう。平等性や不平等性の実感も多分に主観的であり、そこには意識時間や主観的要素も大きく介在しよう。他方で出口の「グッド・ガバナンス」実現のための提案では、制度設計や機会の付与という「時点性・普遍性」が高い処方箋が提示されるようだ。「適切な公共政策を出力する政治制度を設計する」という、経済学的なスタンスを取り、実際に出力につながるかは、保留にしている印象である。

次が法学である。憲法に限って議論されているが、基本的人権や個人の尊厳の侵害が、貧困を含めた「諸悪の根源」とし、その原因を「法の支配（法規範、裁判制度、三権分立）など」の欠如に求める。そして解決のために、個人の尊厳に危機をもたらす、貧困撲滅に効果的な憲法制度設計（法の支配の確立、諸法典の制定、三権分立制度の設計、裁判所等の司法制度の確立など）をめざしていくとされる（志賀 2011）。

法学も政治学と同様に、「グッド・ガバナンス」の実現に力を入れているように思われる。また、途上国特有の基本的人権の形に対して、配慮をしているようである。しかし、個々人が経験する人権侵害および尊厳回復の過程の中の経験がもたらす、感情が関わる「意識時間」には十分に焦点が当たっていない¹⁰。主流の法学が、実定法（社会に現に存在する法）に鑑みて検討する学問であり、その検討が専門家によってなされるという構造的な仕組みからくるものであろう。当然その解釈には恣意性（主観）が伴うはずであ

る。しかし、実定法が「原典」として固定される限り、基本的人権という「原子」の注入による、機会均等・規則適用による即時解決が優先されよう。そう考えると、法学のもつ世界観も、「物理学的世界観」に近い。

最後に人類学である。人類学では文化相対的な立場から、「貧困」の定義をもたず、よって「貧困現象」を自動的に問題とは捉えず、むしろ様々な当事者が、「貧困」をどう捉えるかに着目する。特徴的なのは、貧困を作り出す原因を「貧困化（外部者の尺度の押し付け）」に求め、その緩和を、当事者が現状分析および課題設定する、内発的な過程を後方支援することに求めることだ（佐藤峰 2011）。よって、人類学では、感覚や感情、信念、知識の総体としての個人のリアリティにどう迫り「対話的協働（関根 2007）」を通じて寄り添うかという、まさに「臨床の知」が重視される。これは長年、人類学においては、同時間性が表現されず、現地の人々が人類学者とは別の時間の流れの中のように記述されてきたことへの反省によることが大きい（Fabian 1983）。この問題意識はロバート・チェンバース（2000 など）に代表される PRA・PLA（参加型調査手法）にも投影されている。

人類学は当事者の過程や時間感覚、つまりは意識時間を尊重し、事象を理解および支援する立場を取る。よって特定の指標を使用して、変化を切り取るという学問的興味は比較的薄い。しかし開発援助とは特定の変化を求め時間限定的に行われる。人類学が事例に強いが、汎用性がある政策や制度設計に弱いことは、物理学的时间や世界観との親和性を強く持たないという、学問的特性から考えても納得がいく。しかし不思議なことに、比較的長いプロセスを定点観察する特徴を持つ人類学においてさえ、時間の経過の中で起こる変化は観察されても、時間が人や社会に対してどう作用するかという議論はあまり見られない。

このように、時間という視点から、開発諸学を俯瞰して分かることは、「南の国々」および「南北問題」を扱う開発学においても「学問の南北問題」が明示的に現れることである。その中心を占める経済学は、学問モデルが物理学的时间および世界観に親和性が強い傾向を持つ。政治学も分析においては個別具体的な過程を扱いながら、提言においては「政策・制度設計」という経済学に親和性が高いスタンスを取る。政治学に親和性が高い法学は、より個別具体的な判例や事例を扱うが、専門家による測定と診断というスタンスをとり、その恣意性は捨象される。しかし政治学や法学が実際に扱う事例や

判例は、個別具体的な時間性の中にある。そして四つの領域の中で意識時間に親和性が強く、物理学的時間および世界観へのドライブが低い人類学が、開発学においては、「永遠の野党」であることの理由も、時間と世界観で整理するとある程度説明がつく。また、どの学問も二つの時間と世界観を架橋した学問モデルや、時間の作用そのものを織り込んだ学問モデルを持ってはいないことが分かった。しかし開発援助という仕組みを通じて出会う途上国社会には、近代科学的なロジックでは測れない時間の流れや世界観、再現不可能なリアリティがある。よって、学問による現実の把握が完全にできないとしても、二つの時間と世界観の双方を捉えることが、「ありのままの人々や社会」の理解および、その先にある適切な支援の未来構想につながることは、異論を待たないだろう。

2. 開発援助における時間：「点と線の対立」を超えて

冒頭のニカラグアの事例に戻ろう。ニカラグアの暮らしにおいて、協力隊員としては、「時間以前の時間」である「生命の時間」を感じつつ暮らしていた。それは大きな自然という生命のリズムに、小さな自然という人間のリズムがシンクロした、季節とともに巡る時間であった。これを学術的に解釈すると、人間という小さな生命の時間については、部分的には「生物学的時間」と重なるところがあろう。人々も私も、傷が完治するスピードに逆らうような急ぎ方はせず、生きている身体とその機能の変化を感じながら日々を過ごしていた。そして、その中でふと遭遇する「時間が止まったような時間」である「心の時間」は概ね「意識時間」であり、おおむね人類学と親和性が強いと考えて良さそうである。いずれにせよ、皮膚や心で感じとられる暮らしの時間感覚と、多くの開発諸学が持つ時間感覚や世界観とは、かなり違う性質のもののように思われる。

それでは、冒頭の事例における「開発の時間」とは何であろうか。それは、単なる存在時間なのだろうか。ここでは、プロジェクトの根幹に埋め込まれているログフレームおよび、それに基づくプロジェクト評価に焦点を当てて考えていきたい。プロジェクトが評価という時点を目指して進んでおり、事業関与者が最も神経を使う局面でもあり、研究者が関わることも多いからである。

周知のように、プロジェクトは2-3年と時間が限定され、そこでは計画・

実行・評価という流れで物事が進んでいく。そのサイクルに管理ツールとして埋め込まれているのが、ログフレームである。もともと経営学的手法であり、1960年代末にアメリカ合衆国国際開発庁がツールとして採用、1990年代以降は多くの開発援助機関において、ログフレームを計画・実施・モニタリング・評価まで一貫して管理するようになった（鈴木2008）。JICA（2014）では、①事業のさらなる改善および②説明責任の確保という二つの目的のためログフレームを用いて開発事業の評価を実施するとある（同上）。

表4のように、ログフレームは、プロジェクト計画の概念的構成を一枚の表にまとめた概要表である。プロジェクトの目標、成果、活動、投入、リスクなどの情報が4×4のマトリックスに記載されるものである¹¹。複数の活動を投入することがアウトプットを呼び、その積み上げがアウトカムを達成させ、インパクトにつながるという構造である（JICA 2015）。つまりは、インプットとアウトプットの積み上げで成り立つ単純構造を持つ。

ログフレームの採用には賛否両論様々あるが、日本語で最もまとまった考察をしているのが鈴木（2008）である。鈴木はログフレームに描かれたプロジェクトは図2の灰色部分であり、想定されている因果関係（経路1）はプロジェクト要約の内容に相当する「意図された経路」による「意図された望ましい効果」にすぎず、特に全く見えない経路4について把握する必要があ

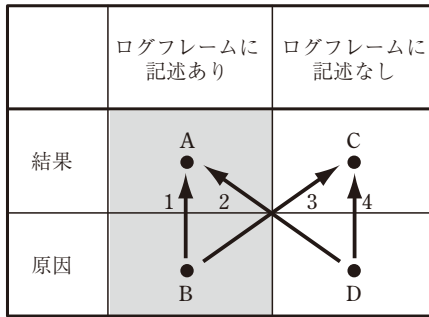
表4 ログフレームの一般的な構成

要 約	指 標	指標入手手段	外部条件
上位目標（インパクト） 長期的な開発効果	上位目標の達成度を測る基準	上位目標指標の情報源	プロジェクトによる効果が持続していくための条件
プロジェクト目標 （アウトカム） プロジェクトの直接的な便益	プロジェクト目標の達成度を測る基準	プロジェクト目標指標の情報源	上位目標達成に必要な外部条件
アウトプット プロジェクトが生み出す財とサービス	アウトプットの産出状況を図る基準	アウトプット指標の情報源	プロジェクト目標達成に必要な外部条件
活動 アウトプットを生み出すためのプロジェクトの活動	投入（インプット） アウトプット産出のための活動に用いられる資源		アウトプット産出に必要な外部条件 プロジェクト実施にあたる前提条件

（出所）：JICA 2015, p.12

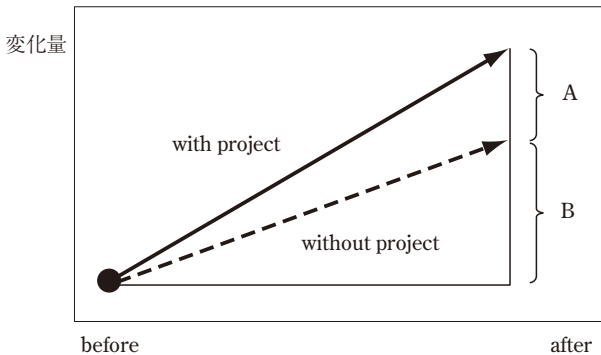
ると指摘する。さらに、図3のように、開発介入の with/without 比較が明らかにできるのは、プロジェクトの実質的な効果（図3のA）の定量的把握のみであると指摘する。つまりはログフレームを用いた評価は、還元主義的であり、曖昧な時間概念、内部環境への偏重があるとする¹²。

代案として鈴木（同上）は、民族誌的手法（定性分析によってプロジェクトの想定している因果関係を相対化する試み）が、ログフレームの限界を克服する可能性を検討している。その試みを関根（2008）は、「ログフレームを使って記述される対象は、様々な時間的「点」における出来事（あるいは結果）の連鎖」であり、民族誌的手法は、フィールドワークを通じて、対象となる事象の動向を時間的な「線」として把握し記述すること」と評してい



（出所）：鈴木 2008（p.46）

図2 プロジェクトの因果関係



（出所）：鈴木 2008（p.50）

図3 with/without 比較の概念図

る。このような「点（経済学）と線（人類学）」の対立および両者の補完性の提案は、調査手法の領域でも、近年多く行われる議論である。

しかしここでいう点と線は、果たして同質のものだろうか。時間と世界観という観点から考えてみたい。まずログフレームを使用した評価は、村上陽一郎の世界ヨーカンの図からよく理解することができる。世界ヨーカンの切片の原子の様子を見る・見比べると全体がわかるというロジックは、プロジェクト評価の構造をも説明する。「開発ヨーカン」を切り分け、その切片の「指標のダンス」を見る、複数の切片のダンスを見比べる行為が、ログフレームを利用した評価の構造と考えて良いだろう。ヨーカンの議論にもあるように、その切片は幅がない時刻であり、厳密には「スナップショット」ですらない。より厳密に事象を捉えようと、点を多数重ねて線に近づけたとしても、それは時刻の積み上げにすぎず、幅のある時間には成り得ない。そして、そこに人類学的な知を重ねがきしても、「線」であらわされるような全体像は捉えられない。民族誌としての知は「ある出来事に関する詳細なプロセスについての記録」であり、それは部分的真実であり（クリフォード1996）、決して全体像を指し示さないからだ。複数の点を深掘りし、いわば「塊」して捉える作業であっても、線に繋がるという考え方は原理上できない。扱う時間と世界観が違う二つの知を「点と線」という比喩で解釈し、「異なる性質の学問を組み合わせれば全体が把握できる」とする、学問の万能感が再考されるべきであろう。

他方で、点（近代科学の知）と塊（臨床の知）ということが物質上に最も現れているのが、生命科学での「遺伝子」と「ゲノム」の関係性である。ゲノムはいわば「点」である遺伝情報の集合体であるが、遺伝情報を持つものは2割で、それ以外の8割は「遺伝情報の働きを調節するため」に存在し、両者は相補的な関係にある。これをプロジェクト評価に当てはめると示唆に富む。現在のプロジェクトでは、家計や生産性、妊産婦死亡率や就学率など「遺伝情報」に関する「遺伝指標」が大半を占め、その周りにある「調整指標」、たとえば地域・家庭内分配や、保健医療や初等教育の内容という、質に関する指標は周辺化されているように思われる。この配分をゲノムに倣い逆にしてみる、指標の組み合わせで変化を測る、あるいは2種類の指標の相補性を見るという視点を取り入れるだけで、随分と違うように評価が組み立てられるのではないか。

加えてゲノムという点は細胞という塊の上であり、細胞には自己複製ではなく微妙に変化する、つまり自己創出する性質がある。特に「調整指標」に関わるころは定性的な性質が強く、それが変化することで、その上に載っている定量的な「遺伝指標」を変えていると解釈するとどうだろうか。そう考える際に、少なくともプロジェクトのある要素について、定性的な評価と定量的な評価を重ね書きすることは、意味があるように思われる。つまり「開発の時間」の表層には物理学的な時間に属する点だけが見えているが、一つの点を掴んでひっぱると、そこにはその何倍も大きな質的な時間や塊が立ち現れる。そう検定すると、二つの時間と「南北の知」をある程度統合した、開発研究の端緒がつかめるのではなかろうか。

3. 現場で起きていること：多様な時間と世界観のつながりと隔たり

しかしながら上記の「点と塊」の議論は、「変化が何か」についてどう説明するかについての考察である。プロジェクトの中での応答のプロセス、「見える変化」と「見えない変化」が、時間の流れの中で、どう実際に起こっているかをあまり説明してはいない。最後に、実体験に立ち戻り、変化の起こり方と時間の関係を考えてみたい。

冒頭のエピソードの中で、私が専門家として投入されることは、プロジェクト当初には想定されていなかったと書いた。プロジェクトは「母子保健」が中心であり、20代以上の女性の「安全な出産」にフォーカスされていた。しかし実際に事業をしていくなかで、10代の「危険な若年妊娠」が予想以上に多く、その「予防」が必要との認識から、青少年への働きかけをするという判断があった。私の主な仕事は若年妊娠関連の現状調査をしながら、各保健センターに「青少年クラブ」を作り、そのメンバーを訓練し学校や地域で性教育に関する知識を伝達してもらうことだった（佐藤峰 2013）。つまり、ログフレームに管理されたプロジェクト目標が達成されるために、専門家として「投入」されたわけである。結果から言うと、着任時に一つ（メンバー30名）だったクラブは、次年度に5（150名）になり、最終年度に20（550名）になった（佐藤峰 2002）。この数字だけ見ると、「模範的な専門家」として、プロジェクトの期限内に着実に投入を積み重ね、見える結果につなげたように見えるが、実際にはそうでもない。確かにクラブ数を1から5に増やすためには多大な努力と資材を投入したことは確かだ。しかしこれ以上働き

かけても増えないという頭打ちの状態が数カ月続いた。その数カ月後に、なぜかクラブは5から15へと一気に増えたのである。

この現象と多様な時間や世界観はどう結びつき得るだろうか。私は不思議に思い、クラブの責任者である看護師達に折々に「理由」を聞いてみた。よくよく聞くと、クラブそのものの存在意義の理解よりも、「普通の若者」と関わることの主観的な楽しさが職場の雰囲気をも明るくしたことが、大きく関わっているようだった。基本的に公設の保健センターには、経済的に潤沢でない病人や妊婦が大勢来るので、業務多忙で、しかも薄給である。そこでスタッフは毎日診察をし、報告書を書き、会議に出るという、あまり変化のない日々を過ごしていたと振り返る。つまり、現在から振り返ると、過去は「時間が止まったような十年一日の退屈で突破口のないルーティンと不満に満ちた日々」として主観的に捉えられていた。これは意識時間に関わるリアリティと言えらるだろう。しかしそこに若者が出入りすることで、保健センターがぱっと明るくなったという。そして自分の仕事について聞かれることで職務への矜持を得たり、個人的な悩みを打ち明けられ一緒に悩んだり、感情のやり取りがあることが、とても励みになるということだった。若者の方も、学校が二部制ということもあり時間を持って余していた。狭い家にいるよりも、少し広い保健センターに行き、そこで友人と活動をしたり、保健センターの仕事を手伝ったりする方が楽しいとのこと。この両者が実感した楽しさの相乗効果が流れを作り出し、スタッフ同士の会話からクラブの存在が口コミで伝わり、クラブの大幅な普及とメンバーの増加につながったようだ。

しかし保健センターの機能や指標に対して、この両者の「出会い」が効果を表していることを計量することはできない。2年間という短い派遣期間で、若年妊娠率の減少という、保健指標で判断されるスーパーゴールは達成されていない。そう思うと、ログフレーム的には評価されないのかもしれない。しかし、その水面下での人々の矜持や人間関係には、ささやかな変化をもたらすことができた。正確には「もたらした」というよりも、異なる人々の出会いの場が偶発的に設定されたことで、彼らが自分の中に「あるもの」を出し合える環境が創りだされた。そして職場に行くことの意味付けや、保健センターの存在する意味が少し変わった。スタッフは明らかに前よりも「生き活き」しているようにみえた。しかし、実証も難しく、再現性も低い。そう解釈すると、二つの時間や世界観は隔たりのあるものとして理解される。

他方で確実に言えるのは、人々の感情という微振動が口コミにつながり、クラブやメンバーの大幅な増加という可視化・数値化される「運動（キーネーシス）」が生じたことである。そしてその後、そのクラブのメンバーが主体となり、プロジェクト終了間際には、若年妊娠をテーマにした社会劇が上映されたり、「子どもと若者による市民会議」が開かれ市長に対して活動への予算要求が行われたりしたのだ（佐藤峰 2002）。そう事象を捉え直すとき、感情やリアリティが形成される意識時間と数値や目に見える運動で物理学的に捉えられる存在時間は、ゆるやかに繋がっている。

V. 結びにかえて

ニカラグアでの時間や世界観をめぐる困惑から、「万人・万物に対して単線的に時間が流れるという設定がどのように立てられ、空間やものの捉え方に影響し、学問や開発援助のあり方に影響しているのか」について知りたいと論文を書きだした。最初に、我々が時間と呼ぶものには、大きく分けて「存在時間（客観的な時間）」と「意識時間（主観的な時間）」があることを論じた。前者は「存在の変化に即する時間」であり、実験により客観的に説明される時間であり、物理学的・生物学的・心理学的時間であることを述べた。中でも多くの学問のデフォルト設定となる物理学的時間は等質・一様・無限という特徴を持ち、その世界観は原子論的なものであることを議論した。

次に、物理学的時間および世界観が、「客観の知」である近代科学の知へと発展する過程を追った。ここでは普遍性、論理性、客観性が重視され、観察者の主観は捨象される。その近代科学の知に対抗して打ち立てられた臨床の知は、固有性、多義性、行為性など「主観」に主軸を戻そうという提案である。実際に、近代科学の知に忠実に学問的モデルを進め学問の限界に達した生物学では、「臨床の知」への揺り戻しが見られる。生命誌や生命科学などの取り組みにより、生命現象を遺伝子の集合体であるゲノムの単位で分析、あるいは動的平衡という概念により説明し、二つの知を統合しようと試みていた。

続いて、開発・援助における時間について論考した。まず、開発諸学を比較したところ、どのディシプリンも、二つの異なる時間・空間・世界観を統

合する学問モデルを持っていないことが理解された。次に、プロジェクト評価に焦点を絞り、ログフレームを用いた定量評価が「世界ヨーカン」ならぬ「開発ヨーカン」の構造を持つこと、そしてそこに臨床の知に関わる定性評価を重ねあわせても、全体像を説明できるとは限らないことを論じた。

そして最後に、開発プロジェクトでの変化は、「インプットとアウトプット」というログフレーム的なものでは決して無いことを論じた。変化は、むしろ専門知が届かないところでの、偶発的な出会いにより一気に起きること、その評価は数値では測りきれないことを論じた。しかし、人々の個別具体的な経験と感情が核になるような働きかけが、偶発的にそして同時多発的にもたらされると、それが「運動」を起こし、何らかの「成果」がでることも確認された。そう見ると、二つの世界はつながっていると考えられる。

つまりは、ログフレームを無意味化しているのではなく、そこにある指標が生み出されるメカニズムは、インプットに対して、単線的に経過する時間とともに、アウトプットが計画的に産出されるという、単純なことでは無いのである。実際に現実が複雑で偶発的という認識は、開発研究の中でも十分に認識されており、そのことが複雑系やプログラムセオリーに繋がる議論や、定量評価における主観的な動きへの着目を生み出していると言えよう。

この論文を書いていく過程で、筆者が痛感したことは、開発研究と開発援助は長らく、「南の国々」を対象としながら、その枠組みは大いに「北的」であったことである。これは開発学が「北」の学問の集合体であることを考えると自明のことである。しかし、援助という行為は、事例にもあるように「南の知」である臨床の知と実践の積み重ねである。そして日本は被援助国と援助国という、南北両方の経験を持つハイブリットな存在とされる。実際のところ、日本の開発研究者の多くは、北的な学問・実践枠組みへの「親和性」と「違和感」の間で、あるいは南的な知への「憧れ」と「失望」の間で、日々逡巡し、思考を重ねているのではあるまいか。そう考える際に、「南北の知」や、その統合や棲み分けについて論考を重ねることは、「日本の開発学」に歴史の偶然が与えた、大きな研究と実践のテーマと言えよう。

2015年から30年に目指されるポスト開発目標 SDGs では、南北の国々に共通の指標が立てられ目指されることとなった。この動きに平行して開発研究自体が「南北の学問」としてその時間・空間・世界観を統合していくこと、あるいは統合し得ないことが論じられ、開発学を読み替え・書き換えて

いくことは、時代の要請もある。そしてその作業に、日本の開発学・実践から知的・実践的貢献をすることは、偶発的に置かれた歴史的状況と現在に鑑みても、大きな意味があることに違いない。

注記

- 1 ゲールド（1990）のタイトルより。
- 2 ログフレーム（プロジェクト・デザイン・マトリックス）とも言われる。実際のログフレームとは厳密には同一のものでないが、この論文ではログフレームで統一。
- 3 心理学的時間は「意識時間」とも関わるように思われるが、脳の反応や行動の変化という客観的な指標から研究されることが多いことから、原著では「存在時間」に分類されている。ここでは原著に倣う。
- 4 原著が書かれたのが1980年であり、現在では重回帰によって諸変数の間の相関を分析し、プログラム・セオリーを考える方法なども行われるなど、複数の点の関係性を読みとく試みがされている。しかし断片における点とその変化を捉えるという基本姿勢にそう変化はない。
- 5 この項は佐藤峰（2016）の一部に加筆修正を加えたものである。
- 6 例を挙げると、哲学では方法知（ライル1987）、動く知（塚本2008）、行動的直感（西田2004）、人類学では、ローカル・ノレッジ（ギアツ1999）や自然学（今西1986）、社会学では Situated Knowledge（Haraway1988）、経済学では「等身大の生活世界（玉ノ井1985）などがある。
- 7 開発諸学の分類については異論があるかもしれないが、国際開発学会の学会発表での内容（小林他2011）においての項目を採用。
- 8 野上（2009）も指摘するように、近年まで経済学においては、貧困層の直接支援よりも政策による間接支援が主だったものであった。
- 9 近年、行動経済学の取り組みには、主観的な選択にも焦点を当てた、カーラン（2013）のような取り組みもあるが主流ではなく、これは「心理学的時間」に分類されるものと思われる。
- 10 ダイヤモンド（2013）にあるように、修復的司法（加害者と被害者が専門家の立ち会いのもと対面し、対話が行われる）という試みは実験的になされている。
- 11 現在使用されているログ・フレームにはより複雑なものもあるが、ここではJICAのプロジェクト評価に汎用的に使用されているマトリックスについて議論をする。
- 12 RCT（ランダム化比較実験）など評価手法の発展により、介入の有無による差異がより正確に理解できるようになってきたが、基本構造に大差はないと考えて良いだろう。

参考文献

- アウグスティヌス (山田晶訳・解説), 2014, 『告白』中央公論社〈世界の名著〉中公文庫.
- アリストテレス (高田三郎訳), 1971, 『ニコマコス倫理学 (上)』岩波文庫.
- (出隆・岩崎允胤訳), 1976, 『自然学: アリストテレス全集 3』岩波書店.
- イーグルマン, デイヴィッド (大田直子訳), 2012, 『意識は傍観者である: 脳の知られざる営み』早川書房.
- 伊東俊太郎, 1980, 「存在の時間と意識の時間」, 向坊隆編著, 『東京大学公開講座: 時間』東京大学出版会.
- 今西錦司, 1986, 『自然学の提唱』講談社学術文庫.
- 上山美香, 2011, 「開発諸学の間に横たわる死角と矛盾: 現実課題に対して開発学は有効か?—経済学からの応答」, 「開発諸学の間に横たわる死角と矛盾: 現実課題に対して開発学は有効か?」, 国際開発学会第22回全国大会, 於名古屋大学.
- ガット, アザー, 2012, 『戦争と文明 (上・下)』中央公論新社.
- カーラン, ディーン (清川幸美訳), 2013, 『善意で貧困は無くせるか: 貧乏人の行動経済学』みすず書房.
- ギアツ, クリフォード (梶原景昭他訳), 1991, 『ローカル・ノレッジ—解釈人類学論集』岩波書店.
- クリフォード, ジェイムズ (ジェイムズ・クリフォード, ジョージ・マーカス編), 1996, 「序論—部分的真実」, 『文化を書く』紀伊國屋書店, 1-50頁.
- グールド, スティーブン (渡辺政隆訳), 1990, 『時間の環, 時間の矢: 地質学的時間を巡る神話と隠喩』工作舎.
- 小林誉明, 2011, 「開発における「時間」—政治経済学からの接近—」, 「途上国開発に関する議論の特殊性と普遍性—知の囲い込みを超えて—」, 国際開発学会第12回春季大会, 於JICA研究所.
- 2011, 「開発諸学の間に横たわる死角と矛盾: 現実課題に対して開発学は有効か?」, 国際開発学会第22回全国大会, 於名古屋大学.
- 近藤久洋他, 2011, 「開発諸学の間に横たわる死角と矛盾: 現実課題に対して開発学は有効か?—政治学からの応答」, 「開発諸学の間に横たわる死角と矛盾: 現実課題に対して開発学は有効か?」, 国際開発学会第22回全国大会, 於名古屋大学.
- 佐藤仁, 2016, 「分業は何を生み出すのか」『野蛮から生存の開発論: 越境する援助のデザイン』ミネルヴァ書房.
- , 2009, 「環境問題と知のガバナンス—経験の無力化と暗黙知の回復」『環境社

- 会学研究』第15号, 39-53頁.
- 佐藤峰, 2002, 「国際協力機構専門家業務完了報告書: グラナダ県地域保健強化(住民参加活動)」, (有)生存開発研究所.
- , 2011, 「開発諸学の間に横たわる死角と矛盾: 現実課題に対して開発学は有効か? —人類学からの応答」, 「開発諸学の間に横たわる死角と矛盾: 現実課題に対して開発学は有効か?」, 国際開発学会第22回全国大会, 於名古屋大学.
- , (鈴木紀・滝村卓司編) 2013, 「ことば・人・場所をつなぐ: 「若年妊娠予防」を巡るニカラグアでの経験より」, 『国際開発と協働: NGOとジェンダーの視点』明石書店, 227-224頁.
- , 2016, 「開発学の脱脳化へ向けて: 2つの世界開発報告の比較検証を通じて」『国際開発研究』第24巻, 第2号, 7-20頁.
- ジェームズ, ウィリアム(今田恵訳, 今田寛改訳), 1992, 『心理学(上)』, 初版1892』岩波文庫.
- 志賀裕朗, 2011, 「開発諸学の間に横たわる死角と矛盾: 現実課題に対して開発学は有効か? —憲法学からの応答」, 「開発諸学の間に横たわる死角と矛盾: 現実課題に対して開発学は有効か?」, 国際開発学会第22回全国大会, 於名古屋大学.
- JICA, 2014, 「JICA事業評価ガイドライン(第2版)」独立行政法人国際協力機構評価部.
- , 2015, 「JICA事業評価ハンドブック(Ver. 1)」, 独立行政法人国際協力機構評価部.
- 鈴木紀, 2008, 「プロジェクトからいかに学ぶか: 民族誌による教訓抽出」『国際開発研究』第17巻, 第2号, 45-58頁.
- 関根久雄, 2007, 「対話するフィールド, 協働するフィールド: 開発援助における人類学の実践スタイル」『文化人類学』第72巻, 第3号, 361-382頁.
- , 2008, 「特集によせて: 人類学と開発援助」『国際開発研究』第17巻, 第2号, 1-7頁.
- ダイヤモンド, ジャレッド(倉骨彰訳), 2013, 『昨日までの世界(上)』日本経済新聞出版社.
- 玉野井芳郎, 1985, 『科学文明の不可: 等身大の生活世界の発見』論創社.
- チェンバース, ロバート(野田直人・白鳥清志監訳), 2000, 『参加型開発と国際協力—変わるのはわたしたち』明石書店.
- 中村桂子, 2006, 『自己創出する生命—普遍と個の物語』ちくま学芸文庫.
- , 2013, 『科学者が人間であること』岩波新書.

- , 2014, 『生命誌とは何か』 講談社学術文庫.
- 中村雄二郎, 1992, 『臨床の知とは何か』 岩波新書.
- 西田幾多郎, 2004, 『西田幾多郎全集〈第2巻〉 自覚に於ける直観と反省・意識の問題』 岩波書店.
- 野上裕生 (下村恭民, 小林誉明編著), 2009, 「社会科学としての貧困研究: 貧困問題と経済学の出会い」, 『貧困問題とは何であるか: 「開発学」への新しい道』 25-59頁, 勁草書房.
- ノラン・リオール, 2007, 『開発人類学: 基本と実践』 古今書院.
- 福岡伸一, 2007, 『生物と無生物の間』 講談社現代新書.
- , 2009, 『動的平衡—生命はなぜそこに宿るのか』, 木楽舎.
- 村上陽一郎 (向坊隆編著), 『東京大学公開講座: 時間』, 1980, 『東京大学公開講座: 時間』 東京大学出版会.
- 山本義隆, 1997, 『古典力学の形成 ニュートンからラグランジュへ』 日本評論社.
- ライル, ギルバート, 1987, 『心の概念』 みすず書房.
- デュ・ヌイ, ルコント (渡部昇一訳), 1994, 『人間の運命』 三笠書房.
- 渡辺慧, 1973, 『時間の歴史: 物理学を貫くもの』 東京図書.
- Flyvbjerg, B. 2001. *Making Social Science Matter: Why Social Inquiry Fails and How It Can Succeed Again*. Cambridge University Press.
- Haraway, D. 1988. "Situated Knowledges: The Science Question in Feminism and the Privilege of Partial Perspective." *Feminist Studies* Vol.14, No.3. (Autumn, 1988), pp.575-599.
- Yanagihara, T. 2016. "User-Centered Approach to Service Quality and Outcome: Rationales, Accomplishments and Challenges." Working Paper, No.123, JICA-Research Institute.